

# 匠 瑳 探 訪

## 飯高の森

今年も檀林コンサートが催される季節となりました。会場となる飯高寺を中心とした飯高地区は、歴史にまつわる伝説に事欠かないところです。

匠瑳地区大浦から境橋を渡って飯高に向かうと、正面がこん

もりした森のように見えます。この飯(めし)を盛ったような地形が、飯高の地名になったのでしょうか。

境橋がかかる川を境川、借当川ともいいますが、1300年ころにはこの川によって大浦方面を匠瑳南条庄、飯高方面が匠瑳北条庄に分けられています。

飯高寺の1639年(寛永16年)の梵鐘(ほんしょう・釣り鐘)に、「匠瑳郡飯高村」とあるのは匠瑳北条庄のなごりでしょう。飯高村が香取郡になるのは、1700年ころからです。

1889年(明治22年)周辺6か村の合併で、「飯高村」となりますが、1200年から1300年代にかけてこの地方の小豪族に飯高氏を名乗る者があり、匠瑳北条庄の役目として香取神宮(香取市佐原)の改修を請負ったことでその名が知られるようになったでしょう。

濃く残っています。明治30年代にまとめられた『飯高村郷土誌』には、飯高地区にまつわる伝説がのせられています。その中のひとつ、「飯高村の宿屋にとまった甲州(今の山梨県)の商人が商いが済んで帰る途中に殺された」ことで始まる「種割れ梅」の話などは、古典落語にも通じる話です。全国から学僧が集まり、今でいう学生街が飯高に形成されたので各地のいろいろな話が伝わり、残ったでしょう。「飯高寺のキツネ」「ズイドウという学僧」「枇杷田(びわた)の市兵衛」など伝説の多くが檀林にまつわるものです。

飯高神社は「飯高妙見(みょうけん)宮」とよばれ、ご神体が亀に乗った妙見像であることから、ふもとの妙福寺は「亀の寺」とされ、鳥居や石灯籠はこの宮のご利益にあずかる大阪や江戸、佐原の信者から寄進されたものです。

この妙見様は、千葉氏がまつっていたものを飯高の者が「ぜひとも飯高に来てほしいと祈ったので、亀田というところに飛んで来た」といいます。

地区のいたるところに伝説が残る「飯高の森」は、「伝説の森」ともいえるでしょう。

境橋から飯高地区を望む景色

江戸時代以降は、何といても檀林の影響が色

問八日市場図書館

〒73・3746